



ひめゆり平和新念資料館

資料館だより



第47号
2011. 6. 1

目次

- 東日本大震災で被災されたみな様へ・・・・・・・・・・ 1
- 当財団が「公益財団法人」に認定・・・・・・・・・・ 1
- 資料館トピックス・・・・・・・・・・ 2
 - 台湾の国立台東生活美学館のみな様が来館／巡回展開催報告 大阪会場／初の県外巡回展「ひめゆり 平和への祈り [沖縄戦から 65 年]」が閉幕／開館 20 周年事業 資料館内外整備工事完了／伊原第三外科壕の実測調査を実施／「解散命令後の戦跡めぐり」実施
- 2011(平成 23)年度の事業・・・・・・・・・・ 6
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・ 6
- 統計に見る 2010 年度・・・・・・・・・・ 7
- 研究ノート④ 沖縄陸軍病院までの動員ルート・ 9
- 仲宗根政善日記抄 (44)・・・・・・・・・・ 11
- 本棚(仲程昌徳)・・・・・・・・・・ 13
- 声・・・・・・・・・・ 14
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・ 15

東日本大震災で被災されたみな様へ

このたびの東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

沖縄戦によって多くの学友を失った私たちは、ひめゆり平和祈念資料館を建設し、命と平和の大切さを訴え続けてきました。目の前で命が奪われる恐ろしさと悲しみを体験した者として、お亡くなりになった方のご冥福をお祈りし、ご遺族に深くお悔やみの言葉を申し上げます。

当財団として、沖縄タイムス社を通じて100万円、福島県郡山市と茨城県水戸市に各50万円の義援金をお送りいたしました。郡山市は沖縄戦直前、「別れの曲」を作詞し、ひめゆり学徒に贈った太田博陸軍少尉の出身地であること、水戸市は今年の巡回展の開催地となったことがご縁です。

一日も早い被災地の復興と被災者の方々の生活再建をお祈り申し上げます。

当財団が「公益財団法人」に認定 「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」に

このたび当財団は、「公益法人制度改革」に伴う法人の移行申請を行い、公益財団法人として認定されました。これを機に、名称を「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」から「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（略称：ひめゆり平和祈念財団）」に変更しました。

今回の認定を受けて、公益目的事業の内容をますます充実させていこうと考えておりますので、今後とも、みな様のご理解ご協力の程、よろしく願いいたします。

公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団
理事長 本村 ツル

* 認定後の当財団の公益目的事業

1. 事業の内容

世界平和のための活動

2. 趣旨（目的）

ひめゆり学徒の体験を語り継ぎ、戦争の実相を伝えることで、再び戦争をあらしめないよう、永遠に世界平和を訴え続けることを目的にする。世界平和のために尽くすことを目標とし、特に「戦争と教育」の問題を重視する。

3. 事業

- (1) ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業
- (2) ひめゆり関連の戦跡壕の調査・保存・活用事業
- (3) ひめゆり平和研究所の設立準備事業

資料館トピックス

◆台湾の国立台東生活美学館のみな様が来館

去る2011年3月15日、台湾の国立台東生活美学館のみな様が当館を訪れ、交流を温めました。

同館の今回の来県は、沖縄県平和祈念資料館との交流事業「子ども・未来・メッセージ展」の除幕式への出席が目的で、来県の利用し、昨年同館によって台湾に招かれた当館ほか佐喜真美術館との交流も行われました。

当館を見学した後、代表の洪慶峰・中華民国政府行政文化建設委員会副主任委員は「軍国主義が戦争を招き、国ごと戦争に巻き込まれました。師範学校や県立第一高女の女子まで戦場に動員し、将兵の世話をさせました。その後連合軍の反撃により、ほとんどの女子生徒は洞窟の中で犠牲になりました。こんな悲惨なことは、今、振り返ってみると、本当に悲しくてたまりません。これから、戦争がないように、お祈りします。命はお金で買えないものです。誰でも最愛の家族を持っています。みな様のご無事とご健勝をお祈りします」という感想を記していました。また林永発館長は「命をかけて時代を造る」、同夫人の王萍萍さんは「戦争はとても恐ろしいです。強い生命力を持つ宮良館長に尊敬の念を抱きます。この記憶が必ず次の時代にまで残っていくことを希望します。これからも、命の尊さを多くのみな様に伝えてくださるよう期待しています」という感想を記していました。

翌16日に行われた「子ども・未来・メッセージ展」の除幕式で、当館館長の宮良ルリは「今回の展示会では、台湾と沖縄の子どもたちが、平和や人権についての思いや未来へのメッセージを込めて描いた図画や詩などの作品が多数展示されると聞いております。こういった形で、子どもたちが、平和や命や人権の大切さに触れ、未来に希望を託していくという試みは、とても大切なことだと思います」と来賓のあいさつをいたしました。当館では、これからも台湾のみな様との交流を深めていきたいと考えております。



資料館を見学する国立台東生活美学館の関係者



国立台東生活美学館のみな様と当館証言員

◆巡回展開催報告 大阪会場

巡回展の最後の会場となった大阪人権博物館（リバティおおさか）では、2010年11月16日（火）から12月26日（日）にかけて開催されました。大都市での開催で交通アクセスのよさもあり、期間中は、大阪府内はもとより関西全域から多くの来場者がありました。

大阪は、第二次大戦末期に度々空襲があり、1万2000人を越える死亡者と2000人余の行方不明者が出たとされています。大阪人権博物館周辺も大きな被害を受けた場所のひとつです。博物館のある場所は当時小学校で、その校庭には空襲直後に多くの遺体が運ばれてきていた、という歴史をもっています。期間中には、元ひめゆり学徒による講演会が行われました。12月18日（土）、19日（日）には、当館の宮城喜久子副館長が「今、次世代へ伝えたいこと—元ひめゆり学徒の証言」と題して講演を行いました。ま

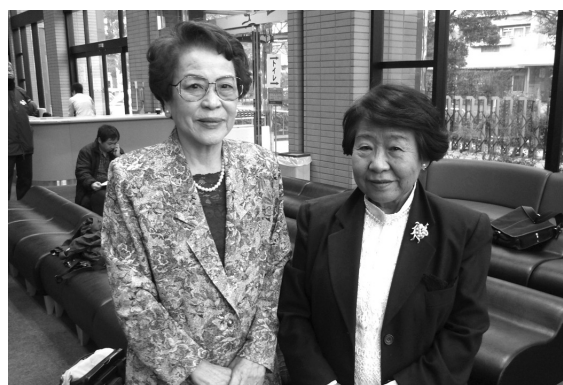
た、12月23日(木)には、「大阪在住・元ひめゆり学徒の沖縄戦」と題して、新川初子さんの講演が行われました。新川さんの教え子も多く訪れ、戦争体験者としての新川さんと出会い直している様子でした。どちらの講演会も年末にもかかわらず満席となりました。若い世代や親子連れも目立ち、多くの方々に戦争体験を直接伝える機会となりました。

また、12月11日(土)には、大阪人権博物館の企画による学芸員セミナー「仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を読む」が開催され、展示や証言とは別の角度から沖縄戦をたどる試みとなりました。

会場には関西圏に住む沖縄出身者の姿も多くみられ、ボランティアガイドの方にご自身の沖縄戦の体験を話される方もいらっしゃいました。



展示を見学する来場者



講演を行った副館長宮城喜久子と新川初子さん

◆初の県外巡回展「ひめゆり 平和への祈り[沖縄戦から65年]」が閉幕

昨年の4月から12月にかけて行ってきた、初の県外巡回展「ひめゆり 平和への祈り [沖縄戦から65年]」がこのほど終了しました。

今回の巡回展は、①当館を訪れることができない県外の方々へひめゆりからのメッセージを伝えることができた、②開催地の報道機関などで取り上げていただき、当館の存在を広く知らせることができた、③共催の開催館や朝日新聞社、取材者など、共に平和について考え協力していただける仲間の皆さんが増えた、④次世代職員の力の蓄積となったなど、大きな意義がありました。

(1) 巡回展の開催趣旨

①戦争体験を生々の声で伝える機会とする。 ②命と平和を考えるきっかけとする。 ③戦争体験の継承を考える機会とする。 ④当館を次世代へつなぐ試みとする。

(2) 各会場における会期

開催館名	会 期
高浜市やきものの里かわら美術館 (愛知県)	2010年 4月 3日～2010年 5月 16日
長野県立歴史館 (千曲市)	2010年 5月 29日～2010年 7月 11日
四日市市立博物館 (三重県)	2010年 7月 21日～2010年 9月 5日
水戸市立博物館 (茨城県)	2010年 9月 19日～2010年 10月 24日
大阪人権博物館 (大阪市浪速区)	2010年 11月 16日～2010年 12月 26日

(3) 入場者数

開催館名	開催日数(日)	総数(人)	1日平均(人)
高浜市やきものの里かわら美術館	38	9,044	238
長野県立歴史館	38	8,728	230

四日市市立博物館	41	9,383	229
水戸市立博物館	29	6,875	237
大阪人権博物館	34	12,188	358
合 計	180	46,218	257

(4) 各会場におけるひめゆり学徒生存者講演会参加者

5館の合計	約4,016人
-------	---------

(5) 各会場に寄せられた感想文（要旨）

戦争の実相を知った。平和の尊さを知った。／ひめゆり平和祈念資料館が引っ越してきたと思うほど、内容が充実していた。／（住んでいる場所での開催なので）資料館より時間をかけてじっくり見られた。／憲法9条を守りたい。／ひめゆりの戦後を見て、継承の大切さを知った。私も伝えていきます。／沖縄の基地問題の原点がここにある。／体験者の講演を聴いて感銘を受けた。／朝日らしいよい企画だった。／平和を唱えるだけでは平和は担保できない。／このような企画を全国で実施してください。

◆開館 20 周年事業 資料館内外整備工事了

当館では、開館 20 周年を迎えた 2009 年より、20 周年記念事業の一環として、資料館内外の整備事業を行ってきましたが、4 月 20 日に工事が完了しました。今回の整備事業は、来館される皆様によりよい環境で沖縄戦について学んでいただけるよう、行ったものです。

1. 第三展示室リニューアル

第三展示室は、ひめゆり学徒の証言映像を 100 インチのスクリーンで上映しており、多くの来館者が足を止めて見学する展示室のひとつとなっています。その一方で、狭い展示室に見学者があふれ、混雑することが度々ありました。来館者が落ちついた環境で体験者の証言に向き合うことができるようにすることと、館内の安全面とに配慮し、第三展示室部分を増築しました。約 60 名の方が一度に見学できる広さとなり、混雑時にも第四展示室への通り抜けがしやすくなりました。

この増築に伴い、第三展示室の展示パネルも新しくしました。沖縄戦の進行にともないひめゆり学徒の死亡者が増えていく様子を、グラフ化したパネルとアニメーション映像で表現しました。南部一帯での被害の大きさが理解しやすい展示をめざしました。

2. 館内トイレ改装

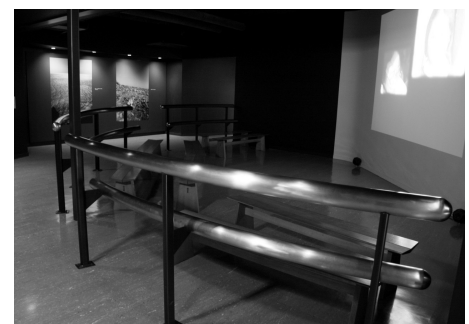
多くの来館者を迎え、手狭になっていた館内トイレを改装しました。男女トイレともにベビーシート付きの個室を設置したほか、オストメイト対応のゆったりトイレも設置しました。

3. 第五展示室通路増築、休憩所、救護室の設置

第五展示室と第六展示室との間を増築し、これまでわかりづらかった第六展示室への導線がスムーズになりました。また、このスペースにベンチを設け、休憩所としました。長時間見学される方や、お子様連れ、ご年配の方々から要望の多かったものです。さらに、この増築部分に救護室も設置しました。これまで別館で対応していた救護者への対応をすみやかにできるようにしました。



第三展示室の展示パネル



第三展示室

◆伊原第三外科壕の実測調査を実施

今年3月14日(月)～22日(火)と4月2日(土)～10日(日)の2次にわたって、ひめゆりの塔が建つ伊原第三外科壕(糸満市字伊原在)内部の実測調査を行いました。この調査は、琉球大学法文学部の考古学研究室(池田榮史教授)の協力によって実施されました。

今回の調査では、壕の三次元レーザー計測(専門会社)後に壕内における遺物の位置などの現況を実測し、記録したうえで、壕内に散在している遺物を収集することを目的としました。今回の調査で検出された遺物の総数は2138点(およそコンテナ30箱分)で、壕内に散在していた遺物をほぼ全て収集することができました。取り上げた遺物の内容としては、陶磁器片が最も多く、その他、ガラス片、軍靴、キセル等も見られました。現在、調査報告書の刊行に向けて資料を整理中です。今後も継続的に調査を行う予定です。



伊原第三外科壕内部

◆「解散命令後の戦跡めぐり」実施

館内改装工事による一時休館のため、2011年3月27日(日)と30日(水)の2日間、証言員と職員の研修として「解散命令後の戦跡めぐり」を行いました。1945年6月19日、ひめゆり学徒隊に解散命令が出された後、学徒は少人数に分かれて戦場に散らばりました。これまでも何度か「ひめゆり学徒隊の戦跡めぐり」を実施しましたが、このように解散命令後に一人ひとりがさまよった場所をたどるのは初めてでした。

27日は山城本部壕、山城のアシガー、東辺名、多くの学徒が犠牲になった山城丘陵、荒崎海岸と喜屋武海岸(カサカンジャー近く)、米須海岸(魂魄の塔近く)をまわり、その場所での体験を証言員に話してもらいました。あいにくの天気でも風も強く、小雨の中を海岸の岩場まで行くのは大変でしたが、証言員は「学友が亡くなった場所を自分の目で確かめたい」と、足を運んでいました。夏日となった30日は喜屋武岬(平和の塔)、大度浜、ギーザバンタ、八重瀬岳、真栄里、第二野戦病院真壁分院跡、真壁の千人壕(アンガー)を訪ね、学徒がよじのぼった崖や水を飲んだわき水などを確認しながら、証言員に体験を聞きました。

東海岸に向かった学徒、西海岸に向かった学徒、北上して糸満や八重瀬岳に向かった学徒など、岩陰やアダンの茂みに身を隠しながら、懸命に米軍の包囲網からの脱出を試みていた様子が伝わってきました。66年前の解散命令後の戦場彷徨の断片に触れることができた2日間の戦跡めぐりでした。



3月27日 喜屋武海岸



3月30日 喜屋武岬

2011(平成23)年度の事業

当財団では、今年度、下記の事業を予定しております。

1. ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業

(1) 教育普及

- ①アニメ「ひめゆり」の製作・公開
- ②絵本「ひめゆり」(仮称)の製作・発行
- ③元ひめゆり学徒の戦争体験講話事業
- ④平和思想啓蒙普及のための出版事業
- ⑤教員向け・戦跡ガイド向け研修会の開催

(2) ひめゆり学徒と沖縄戦の資料収集・整理保存・調査研究

- ①電子アーカイブ及びデータベース構築に向けての調査

(3) ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行

- ①ひめゆりの塔の慰霊祭の挙行

2. ひめゆり関連の戦跡壕の調査・保存・活用事業

- (1) 伊原第一外科壕・伊原第三外科壕(ひめゆりの塔のガマ)の戦跡考古学調査
- (2) 伊原第三外科壕の地盤調査及び保存工事
- (3) 伊原第一外科壕の保存・活用に向けた準備事業

3. 平和研究所設立準備事業

相思樹

巡回展が語り聞きの場に

説明員 仲田晃子



県外巡回展の会期も残すところ数日となったある日、最後の会場となる大阪人権博物館に訪れました。ボランティアガイドの男性が、今回展示を見た方はとても黙っていられなくて話をしに来られること、話をたくさん聞いた展示会だったことを教えて下さいました。

男性は、印象に残った話のひとつとして次のような話をしてくださいました。沖縄戦のときに二歳だった方が来場された。その方は家族で逃げていたが隠れていた場所自分分は泣いたため、殺されそうになった。どうせ死ぬなら家族は一緒にいたいということで全員そこを離れて別の場所に移った。その話を大きくなってから母から聞かされた。その時に殺されていたら私は今日ここに来られなかったと笑って話された。その話を聞いた男性は、生きてこうやって話をしてくれてありがとう、と言いたかったが言えなくて、じゃあ今は六七歳ですね、と言ってその方と一緒に笑ったとのこと。男性は、冗談で返したことを悔いているようでした。

当時二歳だった方の沖縄戦は、母の語りによって経験されて語られ、さらにその語りや大きな話として聞き取り、しかし冗談で返したことを自省する男性の語りを通じて私は聞きました。この話は、「ひめゆり展」の会場でなされたものですが「ひめゆり」を伝えるものではありませんし、男性の話から想像するに、その体験者の話は沖縄戦の戦場や体験の詳細をほとんど伝えていません。しかし、それが男性にとつて大事な話として受け止められ、また、私は、男性が沖縄戦の体験者と出会った話として聞きました。何人かの人を通じて語られる沖縄戦の体験が、おそらく語り手と聞き手にとつての意味が少しずつずれながら、しかし伝えられることが実感でき、伝わるとはどんなことか、と改めて考えさせられる体験でした。

巡回展の展示は、「ひめゆり」の沖縄戦体験が当館の展示と同じようにできるだけ詳細に伝えられるようにしましたが、この話が、沖縄戦体験を細かく伝える展示会場でなされた語りでなければ、この男性はこんなにも大切に話を受け止めたでしょうか。「ひめゆり」を伝える展示会場が、そのように小さな語り聞きの場になっていたら、そのこと自体にも、大きな意義があったのではないかと思われた出来事でした。

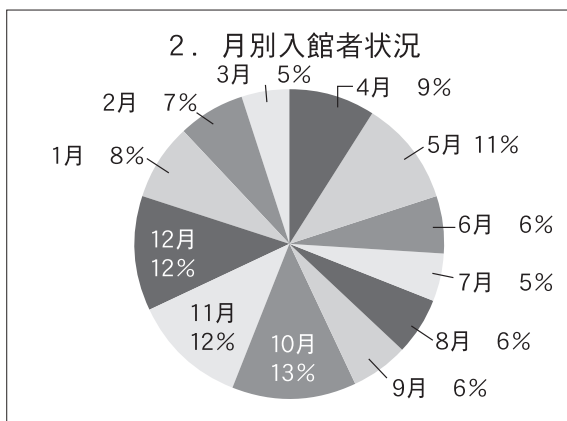
統計に見る2010年度

1. 総入館者状況（入館料免除を除く）

- ・ 昨年入館者は694,162人（前年の769,852人より－75,690人）。1か月の平均入館者は57,847人、1日平均は1,955人（慰霊の日と臨時休館日9日間を除く355日）。
→開館以来22年間で19番目の入館者数。
- ・ 開館以来の22年間の累計は17,804,367人で、年平均入館者数は809,289人、1日平均は2,255人（ただし、1989年度の開館期間は9か月間）。
- ・ 2010年2月で開館以来の入館者が1,700万人を超えた。

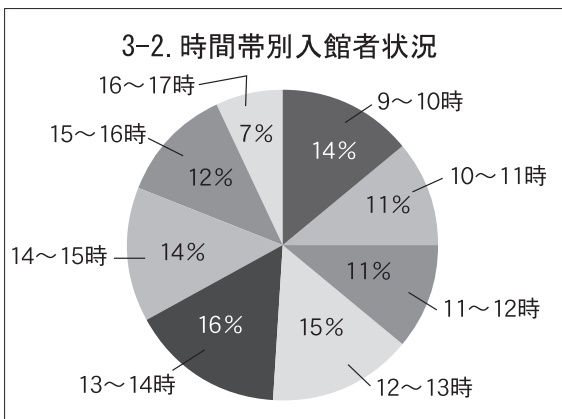
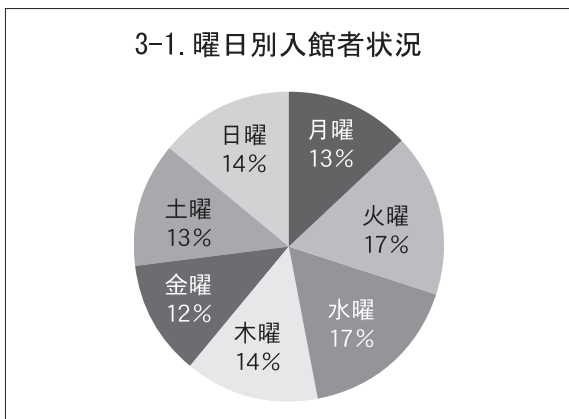
2. 月別入館者状況

- ・ 昨年1年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの10月～12月の3か月間。3か月間の合計は255,445人で、総入館者数の37%（小数点以下を四捨五入。以下同じ）。
- ・ 入館者数が少ない時期は7～9月。3か月間の合計は117,306人で、総入館者数の17%。



3-1. 曜日別入館者状況 / 3-2. 時間帯別入館者状況

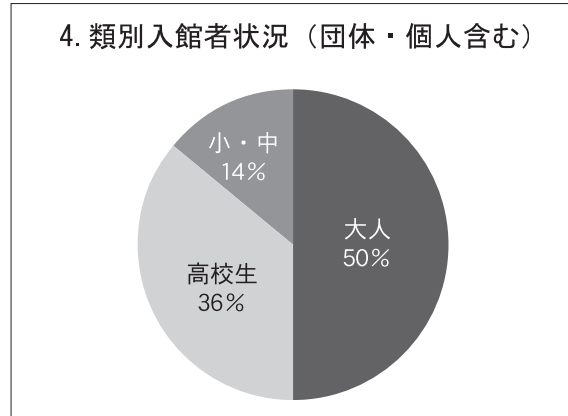
- ・ 曜日別では、週半ばの火・水に集中している。
曜日別：月13%、火17%、水17%、木14%、金12%、土13%、日14%。
- ・ 時間帯では、12時から15時までの午後の早い時間帯が少し多い。



4. 類別入館者数

【総数】入館者の割合は、大人が50%、高校生36%（そのうち97%が団体で入館）、小・中学生14%（そのうち75%が団体で入館）。22年間の平均では、大人が68%、高校生22%（そのうち94%が団体で入館）、小・中学生10%（そのうち62%が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が66%と高く、次いで中学生19%、大人14%、小学生1%となっている。



5. 学校団体の入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,303校、315,276人（前年の2,344校、327,206人に比べ－41校、－11,930人）。内訳は、小学校が91校で4%、中学校が746校で32%、高校が1,466校で64%。

【地域別】

- ・全体では、関東31%、近畿16%が多い。
- ・小学校は、沖縄56%、九州18%、関東10%の順に多い（前年は沖縄59%、九州15%、関東12%）。
- ・中学校は、近畿35%、中国17%、九州16%の順に多い（前年は近畿33%、中国17%、九州17%）。
- ・高校は、関東48%、東海17%、信越8%の順に多い（前年は関東49%、東海16%、信越9%）。

【都道府県別】

- ・小学校は、沖縄51校、鹿児島15校、東京4校の順に多い。
- ・中学校は、大阪102校、岡山73校、兵庫66校、熊本58校の順に多い。
- ・高校は、東京215校、神奈川137校、愛知85校、千葉82校の順に多い。
- ・全体に占める沖縄の中学・高校の割合は、中学校4%、高校0.3%。

【月別】

- ・10月20%、12月19%、11月17%、5月13%の順に多く、4か月間で全体の69%を占める。
- ・小学校は、6月22%、11月20%、4月10%の順に多い。
- ・中学校は、5月49%、4月17%の順に多い。
- ・高校は、10月26%、11月21%、12月21%の順に多く、3か月間で全体の68%を占める。

6. 入館料免除 15,266人

団体（特別支援学校・一般団体含む） 176団体／9,839人（うち介助・引率者1,297人）
 修学旅行下見 651校／1,846人
 慰霊の日（6月23日） 3,581人

7. 外国人 4,227人

一高女生たちは、新垣仁正先生が先導していました。師範生たちもおそらく先頭は師範の引率教員の先生が先導していたと思われます。

その時の様子を、師範の引率教員の一人であった仲宗根政善先生は著書『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』に次のように記しています。

「しずしずと識名の坂を登る。うしろから炊事道具を積んだ大八車が一台ガラガラついて来る。しょうしょうとしてふり返りふり返り黒い列は進んだ。やがて識名の高射砲陣地にさしかかった。(中略) 夢ともうつつともつかぬ気持ちで、一日橋への坂をおりていった。あとからひいて来る大八車の車輪がぬけたとあって、列は切れてしまった。一日橋を渡り二、三十メートルのところで休憩した。一小隊ぐらいの兵隊が、ほこりっぽい街道を東へといそいで通った。無燈火のトラックが二、三台すぎた。民間人があわただしそうに荷物を背負って歩いていく。道ばたの草の上にほこりをはらって腰をおろすと、夏虫がしきりに鳴いていた。(後略)」[仲宗根 1980 : 15]

この大八車には、寄宿舎の鍋や釜などの炊事道具のほか、非常持ち出し用の箱に入れた米などが乗せられていました。師範生の列の最後尾を本科2年生の何名かが引いていきました。仲宗根も記しているように、車輪が抜けるなど、なかなか思うように進まなかったようで、途中からは識名の日本兵たちにトラックで運んでもらうことになったと当時の本科2年生は記しています。

宮良ルリは、西平英夫先生に言われて、鋏を持っていきました。「病院に行くのになぜ鋏か」と思ったそうですが、食料集めの際の芋掘りなどにとっても役に立ったそうです。

ルートを見てもらうと、師範生たちが識名方面から南風原を目指したのに対して、一高女生たちは国場方面から南風原へ向かったことがわかります。

なぜ師範と一高女が別々のルートをたどったのか、そのはっきりとした理由はわかっていません。

この頃のひめゆり学徒たちは、戦場がいかなるものなのか知りませんでした。当時一高女4年生

であった宮城喜久子は、著書のなかで南風原へ向かう自分たちの様子を次のように記しています。

「・・・艦砲弾の飛んでくる南の方へ向かっていくのですから、砲声はだんだん大きくなり、不気味さは増すばかりです。途中、幾組もの重装備の日本軍の兵士たちに会い、「勝つまでがんばりましょう」と声をかけ合いました。(中略) 押し寄せる不安を打ちはらうように、『赤十字看護婦の歌』や『勝利の日まで』を歌いながら、夜の道を進んでいきました。(中略) それはまさに、“死への行進” だったのですが、私たちの脳裏には、陸軍病院で負傷兵の看護をしている健気な自分たちの姿しかありませんでした。私たちは、日中戦争、太平洋戦争と、戦争の時代に育ちながら、戦争というものの実態、ほんとうの姿については何も知らぬまま、戦場へ向かったのです。」[宮城 1995 : 27 - 28]

ある生徒は、「病院だから、赤十字の旗が立てられ、そこには弾は飛んでこない」のだと思っていました。戦場がどんなに悲惨なものであるかは、この頃はまだ誰もわかりませんでした。

(学芸課 尾鍋拓美)

[参考文献]

- 仲宗根政善 1980年(初版1946年)『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川書店
- 宮城喜久子 1995年『ひめゆりの少女 十六歳の戦場』高文研
- 宮良ルリ 2003年(初版1986年)『私のひめゆり戦記』ニライ社
- 学校から南風原までのルート：2011年2月14日、ひめゆり学徒生存者たちへの聞き取りによる

仲宗根政善日記抄(44)

[1980年] 一月二十九日

沖国大の最後の授業を終え、仲松氏と一緒に帰る。もう日はとっぷり暮れていた。小雨がふり出した。祖帰[祖国復帰]運動のときから、革新団体が何か行事を催すときは必ず雨が降っていると話し合いながら、志真志バス停留所への坂をおりて行った。

今晚は、奥武之山公園で、ミサイル事故に対する県民総決起大会が催される。約三千を動員するという。さきの米国の大演習に抗議した与儀公園で催された大会も、一般住民の参加は極めて少く、多くは動員された組合員であった。今回もあるいはそうなのかもしれない。動員されて三千名ならば、自発的に参加するのは、その中、どれくらいいるであろうかと気になる。復帰のときのあの熱気はもうない。

雨に濡れながら、小禄自衛隊ゲート前のデモ行進をテレビで見た。婦人の顔が目についた。そのテレビのつぎの画面に、ブラウン国防長官が、有事の際に、沖縄海兵隊一万余をペルシャ湾に即時・急派するとの談話を発表していた。

国際緊張が高まるにつれて、沖縄基地はますます重要性をます。それにつれて危険性はますのである。

われわれは、沖縄戦を体験して来た。九死に一生をえて、生き残り、念願したことは、沖縄を戦争とは、全くかわりのない島にしたいということであった。ところが、二十七年も軍政のもとにおかれて、ベトナム戦への発進基地となり、多くのベトナム人を殺生した。

復帰後も全国の五三%の基地があり、その機能はますます強化されつつある。ミサイルはいつのまにか多量に持ちこまれて、自衛隊は次第に増強されつつある。

日本本土でもおこらなかったミサイル爆発事故が去る二十五日におこったのである。国際緊張の高まりつつある中でミサイルから火を噴くことは、将来への危険信号といえる。今後、基地はますます

強化されて行き、自衛隊も増強されて行くであろう。戦争を知らない世代も次第にふえ、現状に次第になれっこになり、基地が日常的なものになって行くにちがいない。

沖縄戦で生きのびて、再びあのような戦争をあらしめてはならないと絶叫した者も、次第に老い衰えて、その声も地下へと消えて行きつつある。沖縄戦の体験はいかされなければならないと思いつめている者も、伝えようもなく空しく消え去って行く。じりじりと、県民の念願とはかけ離れて思わぬ方向へと進みつつある。

沖縄戦もそうであった。決して、あのような悲惨事を予想したのではなかった。じりじりと戦争にかりたてられて行ったのである。今、戦争へと近づきつつあることをほとんどは知らずにいる。

日本はアメリカに誘導されながら、今思わぬ方向へとすすみつつある。

二月六日

久しぶりに、国頭出身の教職関係者でつくっている水明会を球陽館で催した。十数年ぶりだった。もう皆が七十才前後になっている。老後の話が主だった。さすがに、皆の頭も真白になっていた。中山興真氏が、この頃は告別式に行くのが仕事だともらしていた。その口から高嶺朝賢君がなくなったことを聞いてびっくりした。

今日、泰昭を連れて訪ねた。小禄団地に居を移していることを聞き、いつも一度は訪ねたいと思っていたのにとうとう会わずになくなってしまった。団地入口で、車を下りて尋ねようとする、門札に高嶺朝賢とある。文字も彼の肉筆である。まるで君が案内にでも出て来たような気がした。玄関にはいと奥様が出てこられた。長くあわない中にもう年とっておられる。泰昭ですと紹介すると、驚いたようになつかしがつておられた。久しくご無沙汰している中にそういうことになってとお詫び申した。

ご霊前にぬかづいた。元気そうなかつての写眞が仏壇にかかげられている。真面目な方であった。生前のことがつぎつぎとうかんで来る。

米軍の沖縄上陸が必至となり、学童疎開がはじまり、付属国民学校でも疎開希望者をつのり、約五六十名に達した。さてこれら学童を誰が引率して行くかということになった。進んで希望する者はなかった。田場盛徳君が、誰も希望する者がなく主事が困っておられるようだからといって、血判をおして希望を申し出た。高嶺君も責任感がつよく、行くことを決意した。二人とその家族が、付属疎开学童を引率して行くことになった。長男泰昭と弟孝尚、甥の仲里英夫三名もいっしょにやった。三年以上の生徒たちだった。重いリュックサックをかつぎ、隊列をなして、那覇の街道から那覇港へと歩いて行った。その隊列の最後からついて行ったが、リュックサックを背負うた一年生だった石橋好子さんの歩いているのを見ていると涙がにじんだ。世話人石橋さんのお嬢さんであった。皆はやがて埠頭を離れてはしけから本船にうつって行った。泰昭・孝尚・英夫三名が肩をくんで甲板に立っている。どうぞこれら疎开学童が無事に目的地につくようにと祈り、いっさいを高嶺・田場君に託したのであった。

八月二十三日に、那覇港を発っている。後でわかったのだが、二十二は、その前日、対馬丸が悪石島沖で、敵潜水艦に撃沈されて□□名 [ブランク] の学童が海底の藻屑となっているが、われわれにはまだこの惨事はつたわっていなかった。敏代やおりえ・正子・民子・紀子も、この学童達といっしょに疎開することになっていたのだが、準備をととのえている最中に、縫針が膝坊主にささって、元順病院に入院したために行けなくなった。あの針が今から考えると幸いしたとも考えられる。泰昭を病院につれて、万一のことがあるかもしれないと、敏代に会わせてやった。

疎開船は軍艦だった。海上無事に、鹿児島につ

き、宮崎師範の寄宿舎におちついた。食糧の世話から健康保健いっさいは、高嶺・田場両君とご家族、石橋世話人にまかされた。寄宿舎が空襲されて、屋良美智子が即死してその弟が負傷するという惨事もあった。せっかく疎開して行ったのに、疎開先で、児童を不運な目にあわせ、両訓導はどんなに心をいためたことであろうか。食糧の補給も容易ではなかった。泰昭・孝尚・英夫は、ときどき空腹をかかえて、宮崎刑務所長をしていた達雄兄の官舎を訪ね行つたらしい。

宮崎市内もやがて、危険になり、山手の方へと再疎開した。その当時の写眞が一枚残っているが、皆やせこけている。高嶺氏は、疎開中、幼児をなくされたようだが、それも、われわれには秘していた。

泰昭・孝尚は、静さんが東京からわざわざ宮崎にまで来て、連れてかえってくれて、そのまま、東京で、高校まで出してもらった。

霊前にぬかづいていると、生真面目で、寡黙だった高嶺君のことがうかぶ。町田君などに比して極めてじみだったが、誠実だった。こつこつと教育に専念してくれた。

奥様と泰昭がむかって話している。泰昭はあの当時五年生であった。もう白髪もまざって、私が主事していた年よりは数才も年上になっている。奥様は、いかにも感慨深かそうに泰昭の顔を見つめていた。疎开学童たちが、どれほど、引率の先生達の苦勞を察しているのだろうか。

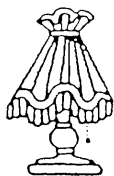
庭には蘭がいっぱい植えられている。故人が丹念に手入れしていたらしい。未亡人は、未娘と二人でさびしく暮らしているともらしておられた。

癌をわずらって、十日ほど入院してなくなったとも話していた。二か月たっても知らずにいたことを申訳なく思った。

※読みやすさに考慮して、字句を補った箇所がある。

また、明らかな誤字は改めた。

※ [] は編集者による注釈。



本棚

(元琉球大学教授 仲程昌徳)

吉浜 忍 大城和喜 池田榮史 上地克哉 古賀徳子 『沖繩陸軍病院南風原壕』

沖繩師範女子部、県立一高女の学徒隊は、1945年3月24日夜、学園を出発し、南風原沖繩陸軍病院に向かう。そして5月25日、病院壕を後にするまで、前線から護送されてくる負傷兵の看護にあたるが、生徒隊が到着した頃のそこは「丘につくられた三十本あまりの横穴壕とそれに付随する三角兵舎の集合」にすぎず、「中央に本部、東方に内科(後に第二外科と改称)、南方に第一外科、道路を隔てて西方に伝染病科(後に第三外科と改称)が位置し、それぞれ五、六ないし十四、五本の壕が配当されていた」ものの、「どの壕もようやく十メートルないし十四、五メートル掘進したところで」止まっていた、「幅一間高さ一間、片側に上下二段二人並びの寝台を造れば、一人がやっと通れる通路しか」なく、「杭木や天板はところどころ入れてあったが、多くは掘ったままで落盤のおそれがあり、艦砲や爆弾には耐えられそうにも思えなかった」と、西平英夫『ひめゆりの塔 学徒隊長の手記』にはある。

学徒隊の到着後、防衛隊等によって壕の掘進、補強がなされていくが、病院壕の数について、西平とは別に、平良進は「第一外科壕は三本あった。第二外科、第三外科もやはり三本ずつの壕を持っていたと思う」と書いていたし、また長田紀春は「第一外科で戦争後半に外科壕として使用した壕は二十カ所だそうだが、他に兵器廠の壕二カ所を使用していたので、計二十二カ所」、「第二外科は患者を収容していた壕が七カ所」、「第三外科は撤退時には患者壕は二カ所だけ」であったと書いていた。

学徒たちは到着当初、三角兵舎に入り、空襲が激しくなってきた頃から「中城湾に向かって口のひらいた未完成の壕」に炊事班と看護隊第二班、「その裏側、炊事場に面する壕」へ本部指揮班、残りの師範生・一高女生全員が24号壕に入る。戦闘が苛烈になり、患者の数が激増し、どの壕も満員になったことで、24号壕の生徒たちも分院壕や各科の壕へ分散配置されていく。

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』には、24号壕をはじめ5号壕、8号壕、7号壕、9号壕、20号壕、19号壕、21号壕、18号壕、10号壕、17号壕等いわゆる第二外科を中心とする壕の様子が記されていた。しかし壕の様子がある程度わかるのは、「丘につくられた三十本あまりの横穴壕」のごく一部にしかすぎない。陸軍病院壕の全容を知るには、それで十分とは決していえないのである。

『沖繩陸軍病院南風原壕』は、その全容を知るための手引きとなる一冊だが、それで各壕のいちいちが分かるということではない。壕の一部、或いは入口の確認ができたのが7号、8号、9号、23号、24号、16号、17号、18号、19号、21号、22号、そして実測調査がなされたのは20号のみで、あとは未確認という全容だが、本書は、そこまでいくのに、さまざまな努力があったことを記録したものである。

南風原町は1990年、「沖繩陸軍病院南風原壕群」を全国にさがかけて文化財に指定。93年には「南風原陸軍病院壕保存活用調査研究委員会」を発足させ、94年8月から「黄金森丘陵(第一外科・第二外科壕群)」の測量調査を始め、96年には壕の「保存・活用」について答申、2003年にはさらに一步進めた「整備・公開」についての答申がなされ、2006年から20号壕の整備工事が実施されていく。

南風原陸軍病院壕群への関心は、壕群の調査・発掘・整備・公開へと進展していくと同時に、さまざまな運動と連動し、町内だけにとどまらず県内・県外へと波及していくことになるが、その根本にあるのは、「モノ」に語らせるということだった。

体験者による戦争の語りが終わる日はいつか来る。しかし、戦争の記憶を消すわけにはいかないとすれば、どうすればいいか。その明快な一つの方向を指し示したのが本書であるといえよう。

声

「知らない」うちにとんでもない失敗を犯してしまわないために

東京都 大学生 女性

突然のお手紙、失礼いたします。

私は、先日資料館にお邪魔した者です。その際、学徒隊だった方からお話を伺うことができ、とても得難い体験をすることができましたので、お礼の手紙を書いています。その方のお名前を聞きそびれてしまったので、資料館あてにお手紙を差し上げますこと、お許し下さい。

私は東京の大学生で、その時はおだんご頭に赤いリュックサックという格好でした。

こんにちは。お元気ですか。私は昨夜、東京に戻ってきました。こちらはもう肌寒く、いつの間にかすっかり秋になっていました。

先日は熱心にお話を聞かせてくださって、本当にありがとうございました。

わたしは戦争を知りません。銃声を聞いたこともなければ、爆撃による振動も感じたことはありません。人が死ぬ瞬間に直前したこともありませんし、うじを見たことさえありません。壕の中の生活も、食べるものがないひもじさも、なにも知りません。

あの後向かった公園で、青い空と海を眺めながら、空が戦闘機で、海が戦艦で埋めつくされている様子を想像してみました。しかし、それは想像し難く、とてもおぞましいことのように思えました。そのおぞましいことに直前した方が現実にいるのだと思うと、「知らない」ではとても済まされないことが戦争なのだ強く感じるすることができました。

そして「知らない」では済まされないことがかつて起きていたし、今も起きているし、これから起こるかもしれないということが、突然わたしに迫ってきました。

学徒隊だった方々は口々に言っていました。

戦争がどんなものか、知らなかった、と。

いま、自衛隊の任務拡大や、憲法9条に関する議論を思うとき、同じことが私たち戦争を経験していない世代にも言えるのではないかと思います。

どれだけメディアが騒ぎたてても、どこかリアリティが無く、「戦争」が、身に迫ってこないのです。

資料館でお話を聞き、そんなことではいけないと強く、強く思いました。

「知らない」うちにとんでもない失敗を犯してしまわないために、「知っている」人々のことばを聞き、後世に残していかななくてはならないのだと思いました。

何も知らないわたしに時間を割いてお話してくださって、ありがとうございました。

生きて、語ってください、本当にありがとうございました。

これからもどうかお身体に気を付けて、語り続けてください。

資料館ガイド

◆資料館ご利用案内

- ①入館受付 午前9時～午後5時 閉館 午後5時25分
- ②休館日 年中無休
- ③入館料 大人¥300 高校生¥200 小・中学生¥100
団体割引 20名以上 10%引き
- ④交通 那覇から糸満市行きのバス^{⑧9}で約30分、さらに糸満バスターミナルから^{⑧2}^{⑩7}^{⑩8}のバスで約15分、ひめゆりの塔前バス下車。

◆多目的ホールご利用の手引き

- ①多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約30分）や証言ビデオ（25分）を視聴することができます。※ご予約が必要です。
- ②講話の時間帯 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00
ビデオの時間帯 09:10 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00
- ③ご予約の際は空き状況をお電話でご確認ください。受付は先着順で、電話もしくは資料館窓口でのお申し込みとなります。
いずれの場合も確認の為、指定申込書にご記入の上FAX又はWEBからお申込み下さい。
- ④ホールの収容人員は200人（席）です。
- ⑤ホールの利用は、ご入館していただく場合に限りです。また、講話・ビデオ以外には使用できません。
- ⑥講師謝礼及び施設使用料等は頂いておりません。
- ⑦毎週月曜日、講話は休みで、ビデオのみの予約受付となっておりますのでご了承ください。
- ⑧年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～15日）は、講話は休みです。また、慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映を行いますので、ホールはご予約いただけません。

◆VTR室のご利用について

- 下記についてビデオを視聴することができます。
- ◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25分）
 - ◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30分）
 - ◇「ひめゆり学徒の戦後」（33分）
 - ◇「戦火に消えた21の学園」（26分）

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第47号
2011（平成23）年6月1日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館
資料館 ☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100
財団事務局 ☎ 902-0067 沖縄県那覇市安里 388-1 ☎ 098-884-1115
URL <http://www.himeyuri.or.jp/>
